

20 世紀初頭のアメリカ公共図書館における日系人問題について - カリフォルニア州サンフランシスコ市を例に -

向後 直美

アメリカでは 1960 年代半ばに至るまで、ジム・クロー法にみられるように、法的にも人種隔離を行うことが許されており、日系人に対しても根強い人種的偏見はみられた。例えば、1900 年代には移民法や外国人土地法などによる法的な差別を受けるとともに、日本人移民排斥運動も起った。一方、排日運動が盛んな時期にも日系人は公共図書館を利用していった。日系人差別の意識が強かったアメリカ西海岸地域で、日系人に対する図書館サービスについて公共図書館はどのように考えていたのだろうか。アメリカ南部地域のように人種隔離という考えの下、日系人に異なるサービスを提供するという議論はあったのだろうか。本研究では日本人移民排斥運動が活発であった 20 世紀初頭を対象に、サンフランシスコ市立図書館の日系人に対する図書館サービスを巡る状況を、地域の状況をふまえた多角的な視点から明らかにすることを目的として、文献調査を行った。

まず、日系人に関する歴史や、アメリカ公共図書館における移民サービス、カリフォルニア州の公共図書館制度を把握するため、関連文献を収集し考察を行った。アメリカの移民サービスは主に移民のアメリカ化を目指して行われ、外国語図書のコレクション構築、市民権獲得のための支援が行われた。次に、日系人に対する図書館サービスを巡る状況を明らかにするため、年次報告書である『サンフランシスコ市年報』の「市立図書館報告書」と『サンフランシスコ図書館委員会議事録』を 1900 年から 1910 年まで分析した。

両文献ともに、日系人に関する直接的な議論は報告されていなかったが、貸出状況と日本語図書も含む外国語図書の購入状況から、間接的ではあるが日系人に対する図書館サービスの状況を明らかにした。

その結果、日系人は制度的差別は受けていなかったものの、他の言語集団と完全に同等のサービスを楽しむことはできておらず、実質的差別はあったといえるのではないかという結論に至った。前者については、日本語図書の購入が記録されていること、図書館利用に関して、有色人種を隔離してサービスするという趣旨の記述を確認することができなかった。後者については、日本語図書の需要があったにもかかわらず、他の移民との人口数を比較すると日本語図書の購入が少なかったことが明らかになった。この原因として、

他言語図書と比べ、日本語図書は 1 冊における平均単価が高いこと、日系人が移民サービスの対象として見られていなかったことが考えられる。しかし、日系人排斥運動の最中でも日本語図書を購入していた点は図書館サービスの点から高く評価されるべきであろう。これは、図書館委員会自身が図書購入決定の権限を有していたためと考えられる。つまり、図書館委員会が、独自に図書館規則を制定・実行することにより、市政などに影響されないサービスができるといえるだろう。

(指導教員 溝上智恵子)